

「瀬戸内海の有する資源の再生と活用－道州制・中四国州の実現に向けて」

平成20年9月26日

大田祐介

1、瀬戸内海の現状

瀬戸内海は東西に450km、南北に15 - 55km、平均水深:37.3m、最大水深:105mの内海であり、複数の島嶼群で構成され、医師であり博物学者であったシーボルトを初めとして数多くの欧米人から高く評価された景勝地である。また、瀬戸内海国立公園は1934年にわが国最初の国立公園として指定された。また瀬戸内海は古来、豊かな生態系を持つことで知られ、現在でも天然記念物の節足動物のカブトガニ、小型鯨類のスナメリなどの海洋生物や、アユ、ホホジロザメを初めとする400 - 500種類を越す魚類が生息している。

しかし、戦後の高度経済成長期に白砂青松の海岸は埋め立てられ工場が林立し、自然環境は破壊され、歴史・文化遺産は次々に姿を消していった。シンクタンクせとうち総合研究機構によれば、かつて文明の海ともいわれた瀬戸内海も、文明に利用される海へと変質を余儀なくされ、水質・大気汚染、ゴミ問題などの負担を背負わされることになった。そして多くの住民がその変質を容認している現状がある。しかし、筆者は瀬戸内海の持つ資源の再生・有効活用が、瀬戸内海を取り巻く地方自治体の発展に繋がり、ひいては中四国地方の発展に寄与するのではないかと考える。ただし、「発展」とは大量生産・大量消費による右肩上がりの経済成長を指すのではなく、歴史・文化・環境と共生するスローライフ社会の実現を指す。しかし、長年の離島振興策等の影響か、未だに地方特有の公共事業による景気回復を信じる向きも根強い。例として朝鮮通信史が「日東第一景勝」と絶賛した歴史的港湾都市・鞆の浦においても、景観保全より道路建設（利便性）を優先する勢力が多勢である。

本稿では、戦後の高度成長期からの瀬戸内海の荒廃の流れを止め、持続的発展に向けて振興策への取組み例や提言を元に、中四国地方が一体となって瀬戸内海の持つ価値を見直し、観光立国として瀬戸内海の再生に取り組む方策を検討する。

<瀬戸内海のSWOT分析>

	機会	脅威
強み	域外の住民、特に外国人からの評価が高い アレックス・カー、CWニコル他	ニセコ町にオーストラリア村ができるように、瀬戸内海にも外国人村ができてもおかしくない資源がある
弱み	年々、多島美や離島の素朴さ（日本人のふるさとの風景）が失われつつある	域内の住民が価値に気付いていない（灯台もと暗し）日本人の文化や観光に対する感覚が狂ってきている

2、過去の振興策の成果

離島振興法の成立に尽力した民俗学者の宮本常一は、著書「日本の離島」の中で「島に人が住み着いたのはロマンティズムや酔狂ではなかった。止むを得ずそこに住んだのである。止むを得ず住まわせたのは政治の中に多くのいたらなさがあったからである」と述べている。そして振興策により利便性が増したことにより、多くの島民が島を離れることとなった。佐野（2001）によると、宮本は田中角栄式の道路建設を中心した公共事業政策を強く批判していたとしている。さらに宮本の「忘れられた日本人」からは、日本人が戦後急速に勤勉さや相互扶助の精神を失っていく姿を読み取ることができる。高度経済成長至上主義の日本人の増加と、振興策による離島への架橋による「ストロー現象」により、瀬戸内海の離島の過疎化は一層加速した。（因島は20年前45000の人口が架橋により30000にまで減少した）

さらに過去40年間の開発により瀬戸内海にはすっかり負のイメージが定着したと言える。1974年の水島コンビナートからの原油流出事故、大量の産業廃棄物が不法投棄された豊島、過度の海砂採取により藻場の消滅に伴う漁業資源の枯渇、赤潮に象徴される水質汚染（ピーク時の昭和50年前後は年間300件発生、今なお年間100件程度発生）、閉鎖水域の瀬戸内海に建設されようとしている上関原発の脅威などの報道により、その価値がすっかり無くなったと勘違いをしている住民も多いのではないか。実際にはその価値を信じて多くの住民が振興策に取り組んでおり、特に成果が挙げられている事例を次に紹介する。

3、現在の瀬戸内海振興の取り組み例

①官民の振興策の違い

NPO法人「かさおか島づくり海社」と瀬戸内海沿岸の広島県・香川県の離島振興策を比較する。県作成の振興策は現状分析に多くの紙面を費やし、理念的な振興策として歴史・文化の保存に触れてはいるが、具体的な振興策の内容は港湾・道路整備等が多くを占めている。対してかさおか島づくり海社はグリーンツーリズムを基本とした様々な体験ツアーやイベントを組み、多くの観光客や学生等を受け入れており、ホームページを見れば具体的な振興策への取組みがよく理解できる。よって、それぞれの得意分野を活かした官民連携の振興策の実施が求められる。

②トライアスロンによる振興策

瀬戸内海沿岸の都市や島嶼部では、地の利を活かしたトライアスロンやマラソン大会による振興策に取り組まれている例が多いことを紹介する。トライアスロンがこれだけ開催されている地域は世界中探しても他に例が無いと思われる。多くの参加者がリピーターとなり、選手同志や島民との交流を深めている。筆者もさぎしま大会等に参加して、コースの素晴らしさや島民の応援に助けられて完走した経験がある。

＜瀬戸内海各地で開催されるトライアスロン・マラソン大会＞

開催県	開催地	大会名	初年度開催	参加者数
広島県	佐木島	トライアスロンさぎしま大会	1990年	約400人
広島県	宮島	はつかいち横断みやじま国際パワートライアスロン大会	2007年	約350人
広島県	倉橋島	アクアスロンくらはし	2000年	約250人
広島県	江田島	ヒロシマMIKANマラソン	1986年	約2000人
愛媛県	中島町	トライアスロン中島大会	1986年	約400人
岡山県	倉敷市	ファッションタウン児島トライアスロン大会	1999年	約500人
香川県	観音寺市	日本学生トライアスロン選手権観音寺大会	不明	約200人
香川県	小豆島	瀬戸内海タートルマラソン	1980年	約3000人
香川県	塩飽本島	塩飽本島マイペースマラソン	1983年	約600人

筆者作成

島興しとしてのトライアスロン・マラソン大会の開催は一定の成果を挙げており、島の風物詩として定着している。さぎしま大会で頭角を現した福本哲郎選手（三原市水道局勤務）は、「三原の鉄人」として日本中の大会で活躍し、三原市の観光大使的な役割を果たしている。

反面、香川県丸亀市広島町で毎年夏に行われていた「瀬戸大橋さぬき広島トライアスロン大会」は瀬戸大橋が開通した1988年から町おこしの一環として始まったが、大会開始当時、約950人だった島の人口は約470人にまで減少し、うち約270人が65歳以上の高齢者のため、大会の開催にはボランティアや外部の支援が必要な状態となり、2000年に中止となった。この事例の教訓として、年に一度の大会に選手を集めるだけでなく、年に数回の現地練習会や合宿等の受け入れを行い、島民との交流を深め定住

に結び付けるような取り組みも必要と考えられる。

③映画による振興策

瀬戸内海はその風光明媚な土地柄と、住民の支援により、多くの映画作品を生んできた。佐木島在住の御畑完治によれば、1960年に撮影された「裸の島」の舞台となった佐木島の隣に浮かぶ宿禰島には、48年後の今尚島を訪れる人がおり、御畑は「Project S」と題して裸の島ファンとの交流を続けている。また、範保博光（自称・天国をつくる男「てんつくマン」）は、現在小豆島にて有志と共に自給自足の生活を始め、その模様をドキュメンタリー映画として撮影している。このような若者達の実験的試みにも期待が寄せられる。

映画のロケ地となることが、観光客の増加や住民の郷土に対する誇りや愛着を生むきっかけとなり、様々な経済効果を生むことが実証されている。特に尾道市は大林監督の尾道3部作のヒットや、男たちの大和ロケセットの誘致により多くの映画ファンが訪れ、観光地としての知名度を上げることに成功した。今後ともフィルム・コミッション等の働きかけにより、映画やTVドラマのロケの誘致に努めることが必要である。しかし、産経新聞（H20.9.24）は今年最大のヒット作となる見込みの高い「崖の上のポニョ」には、鞆の浦ゆかりの建物等が多く登場するが、監督をはじめ制作会社が鞆の浦が舞台とは明言していないことを理由に、福山市はPRに消極的と報じている。その理由は福山市の進める鞆港埋立架橋事業に影響があることを恐れての対応と思われる。すでに映画の効果による鞆の浦の観光客は増加しており、今後、福山市の行政のあり方が問われることになるであろう。

＜瀬戸内海を舞台に撮影された主な映画＞

タイトル	監督	公開年	ロケ地	備考
二十四の瞳	木下恵介	1954年	香川県・小豆島	ゴールデングローブ賞 外国語映画賞
喜びも悲しみも幾歳月	木下恵介	1957年	香川県・男木島	灯台守が主人公
裸の島	新藤兼人	1960年	三原市・宿禰島	モスクワ国際映画祭・グランプリ受賞
故郷	山田洋次	1972年	倉橋島	「民子三部作」の第二部
転校生	大林宣彦	1982年	尾道市	フィルム・コミッション誕生へ
時をかける少女	大林宣彦	1983年	尾道市	原田知世が日本アカデミー賞新人俳優賞
瀬戸内少年野球団	篠田正浩	1984年	笠岡市・真鍋島	夏目雅子主演
さびしんぼう	大林宣彦	1985年	尾道市	大林監督「尾道三部作」の完成
彼のオートバイ、彼女の島	大林宣彦	1986年	尾道市・岩子島	片岡義男の原作では白石島が舞台
男たちの大和	佐藤純彌	2005年	尾道市他	向島のロケセットに100万人が来訪
崖の上のポニョ	宮崎 駿	2008年	鞆の浦？	福山市はロケ地のPRに消極的

筆者作成

4、瀬戸内海の今後の観光開発の方向性

国土交通省から観光大使に任命されたアレックス・カーは、瀬戸内海を外国人も絶賛する理由を、「日本人の心のふるさとの風景」が残されているとし、観光立国を目指すには、観光をめぐる知識の蓄積と、かけがえのない自然・文化の調和が必要であり、そこに日本人の生き方や思想が問われていると述べている。観光業はすべての地域住民が参加でき、大きな産業になりうる。瀬戸内海にはすでに世界遺産の厳島神社もあり、鞆の浦も世界遺産級の価値があるとイコモスからもお墨付きをもらっている。さらに朝鮮通信史がたどった鞆の浦を含めた「海の道」を複合遺産としての世界遺産へ登録する運動も始まっている。他にも全国の国宝文化財の指定を受けた武具類の8割を収蔵する大三島・大山祇（おおやまづみ）神社や、向島・岩屋山の巨石群などの隠れた観光資源も多数あり、これらを上手にPRすれば瀬戸内海は観光立国として自立する高い可能性を秘めている。

次に、ハウステンボス会長である池田武邦が示した「岐路に立つ鞆の浦」にて、瀬戸内海の観光立

国に向けた提案を紹介する。現在ほど輻にスポットが当たっていない12年前の1996年に池田はこの提案を行っているが、「開発か保存か」という対立ではなく、「両立、共生」に主眼を置いている。即ち、自然や歴史的環境を保全しながら、21世紀という新しい時代に対応した近代都市に再生する道筋を具体的に示している。その私案は輻の浦の市街地とほぼ同面積の実験都市ハウステンボスにおいて環境保全と経済開発を両立させた成果を根拠としている。

＜池田・私案の概略＞

	近代都市の問題点	理想都市「輻」構想への道
自然	山を削り海を埋め立て自然のバランスを崩し生態系を破壊して築いた近代都市は、自然災害に脆く、海山の幸を減ぼす結果を招いた。	汚染された港や近海を1960年代の状況にまで回復させ、魚介類の豊富な生息が可能とするよう自然を甦らせる。後背地の植林や生活排水の徹底した再利用による。
路	もともと歩行者のために存在した生活空間の一部であった「路」が、車によって人々は押し退けられ単なる交通手段の「道路」に墮落した。	町内から電柱を取り去り路の下に共同溝を設け、光ファイバー、上下水道、消火栓を配し、高度なインテリジェント防災都市としての機能を備える。車は時速15km以下に制限し、バスや荷捌きの車の空間を兼ねた辻広場を設け、歩行者優先、安心して子供が遊べる空間を取り戻す。
歴史	私達の未来は先人が遺した歴史に深く学ぶことによって始めて心を培う都市づくりの正しい道が拓かれる。効率や機能を追う余り歴史的環境を軽んじてきた近代都市形成の過程は誤りである。	使われなくなった井戸や民家等、崩壊しつつある歴史的町並みを積極的に再生させると共に、まだ生かされ方が不十分のままの多くの歴史的宝庫の生かし方を工夫し創造する。
産業	歴史と伝統のある地場産業が、大量生産品に押され衰退を余儀なくされている。	手作りを主とする質の高い地場産業（水産加工品・保命酒）こそ、これからの時代重要な意義を持つ産業となる。全国に向けて発信し、広く社会にその真価を報せ、顧客を確保し、経済的安定を計ることによって、育成、発展させる価値がある。
都市構造	日本のほとんどの都市は近代化の過程で郊外へスプロール化が進んだ。	輻中心部は地形的条件と社会的条件（人口減）により、近代化に侵させることなく健全な姿を留めている。その中心部は歴史的環境を徹底的に守る整備を行い、周辺部には地下埋設のインフラによるマルチメディア基地、環境に調和したホテル・国際会議場・フェリーターミナル等の近代施設を充実させ、相互に補完しあう都市構造を整備する。

池田は輻の将来を決めるのは地元住民の重大な責任であるとし、住民は戦後の価値観からの脱却を真剣に検討する時期に来ていると示唆している。戦時中、駆逐艦「矢矧」に乗艦し死線を越え、戦後は(株)日本設計において戦後初の高層ビル「霞が関ビル」の設計を手掛け、行き過ぎた近代都市建築の反省を踏まえた池田の時代を超えたメッセージに応える方策を最後に検討する。

5、中四国州の実現により、瀬戸内海の再生を

現在の県境は、一説によると宇治島沖から海に流した樽が潮流で運ばれた線と言われている。しかし、愛媛県と広島県の県境がまたがっている島（瓢箪島等）も存在し、県境の定まった根拠は不明である。その結果、瀬戸内海の東西南北に線引きをすることにより、行政区分と生活圏域の不一致をもたらしており、各県の振興策の取組みにも温度差がある。

道州制議論において、瀬戸内海の一体的な活用には中四国州による取組みが望ましいと考えられるという意見が散見されるが、中四国州の区分けに積極的に賛同しているのは岡山県他少数であり、その背景も岡山市が州都を目指すためとの憶測を呼んでいる。現状では中国地方各県は中国州を、四国は四国州をそれぞれ主張している傾向が強い。また、中四国では広域すぎるし、海により分断されているとの意見もあるが、瀬戸大橋3橋の完成と、将来の尾道・松江道の開通により「松江で朝飯、尾道で昼飯、高知で晩飯」という時代になると言われている。私見であるが、ITによる情報通信網も発達したこともあり、中四国は瀬戸内海により分断されていると考えるより、これまで述べてきた瀬戸内海の価値を共有し、自然・歴史・文化と共生する一体的開発を目指すという方向に政治が舵を切ることが望まれる。そして州都を因島等の島に設け、「逆ストロー現象」を起こさせるという考えはいかがだろうか。広島市や岡山市を州都としたのでは「リトル東京」的な州都が誕生するだけであり、道州制の本旨から外れると予想される。アメリカ合衆国ではカリフォルニア州のサクラメントのような地方小都市

が州都となる例もあり、瀬戸内海の島を中四国州の州都とし、瀬戸内海再生の起爆剤とすることを提案し本稿を終える。

<参考文献>

- 稲田全示 (2008) 「隠された神話 歴史都市・尾道の謎」尾道市
香川県 (2003) 「香川県離島振興計画」
財団法人日本離島センター (1998) 「日本の島ガイド・シマダス」
佐野真一 (2001) 「宮本常一が見た日本」日本放送出版協会発行
田村 秀 (2004) 「道州制・連邦制 これまでの議論・これからの展望」ぎょうせい
西元俊典 (2007) 「瀬戸内海辞典」南々社
広島県 (2003) 「広島県離島振興計画」
毛利和雄 (2008) 「世界遺産と地域再生」新泉社
宮本常一 (1984) 「忘れられた日本人」岩波文庫

<新聞記事>

瀬戸大橋トライアスロン、開催打ち切りへ 島民の高齢化など原因一丸亀市／香川

2001年3月18日 毎日新聞

何を目指す？観光庁 2008年9月21日 朝日新聞

「ポニョ」の舞台めぐり論争 瀬戸内の景勝地、鞆の浦

2008年9月23日 産経新聞 <http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20080923-00000932-san-soci>

<ホームページ>

(株)日本設計・池田武邦名誉会長スピーチ「岐路に立つ鞆の浦」(2008.9.25)

<http://www.jptranslations.com/OldHP/smpnsk2.html#tomonoura>
107+1天国はつくるもの：<http://tentsuku.com/> (2008.9.25)

かさおか島づくり海社：<http://www.shimazukuri.gr.jp/> (2008.9.25)

世界遺産と総合学習の杜：<http://www.wheritage.net/> (2008.9.25)

瀬戸内海：フリー百科事典『ウィキペディア』(2008.9.25)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%AC%E6%88%B8%E5%86%85%E6%B5%B7>
Project S：<http://www8.plala.or.jp/mihatamikan/public-html/projects.top.htm> (2008.9.25)